

2021年度全国科学博物館活動等助成事業終了報告書

実施内容報告書

課題名 触って学ぶ沖縄の鳥たち～視覚障害者向け学習教材の製作と活用～
交付番号 202109
機関名 沖縄県立博物館・美術館
氏名 館長 田名真之（担当 主任学芸員 菊川 章）

1. 事業の目的

沖縄県には、大陸から切り離された島々が、分離・結合を繰り返す中で独自の進化を遂げた固有種が数多く生息・生育する、世界的にも稀有な自然環境が存在する。当館では、日ごろから展示や教育普及活動を通してこのような沖縄の自然を紹介しているが、障害を持つ方々、特に視覚障害者に対しては十分な配慮ができていないのが現状である。

タッチカービングは、バードカービング協会会長の内山春雄氏が考案した、触っても壊れないよう強度を高くした木彫りの鳥で、視覚障害者向けの出前授業やワークショップなど、数々の活用実績がある。当館では、令和2年度に本県の天然記念物であるヤンバルクイナのタッチカービングを委託製作し、沖縄盲学校の児童生徒向けのタッチカービングワークショップを実施したが、大変好評であった。令和3年度は、ホントウアカヒゲとノグチゲラを製作し、県内の天然記念物3種をセットにして視覚障害者向けの教材としたい。そして、完成した成果品を当館のみならず、沖縄盲学校のほか視覚障害者福祉センターなどで教材ないし触れる展示物として活用することを本事業の目的とした。

2. 事業の実施に至った背景

近年、これまで「見る」ことが中心だった来館者サービスを拡張し、視覚障害を持つ方々にも触れることができる資料を用いて学ぶ機会を提供する、いわゆる「ユニバーサルミュージアム」の考え方が普及してきている。当館にも触れることを前提としたハンズオン教材はあるが、視覚障害者への配慮という点では、まだまだ十分とは言えない。特に、生物分野については、死んだ生物を標本にしているということもあり、触れることに対する抵抗をいかに和らげるかが課題となっている。

その点において、タッチカービングは、実物標本とは違い、安心して触れることができるうえ、鳥類学的に精緻に作られているので、視覚障害者が鳥の形態を学ぶのに最適な教材である。鳥の形態を知ると、普段から鳴き声を聞いている鳥の姿を想像できるようになる。鳥は、視覚障害者にとって最も身近な生きものなので、タッチカービングは自然を学ぶ入り口として大いに期待ができる。

しかしながら、本県の場合、鳥であればなんでも良いというわけにもいかない。沖縄にはヤンバルクイナやノグチゲラ、ホントウアカヒゲといった天然記念物の鳥たちが生息して

おり、県民なら誰しも写真や図を見るだけで名前を言い当てることができるほど、その姿が脳裏に焼き付いている。視覚障害者の方々も、たいていその名前だけは聞いたことはあるが、当然ながら姿を想像することはできない。これらの鳥について知ることは、郷土の自然を学ぶ上でも大変重要であり、当館としては、視覚障害者にも健常者と同じように姿を想像できるようになっていただきたいと考えている。

3. 事業の具体的実施内容及び方法

①タッチカービングの委託製作

種：ホントウアカヒゲ、ノグチゲラ

委託先：楽堂工房（内山春雄氏）

②ワークショップの実施（コロナのため中止）

対象：沖縄県立沖縄盲学校の児童生徒、沖縄県視覚障害者福祉センターの利用者

場所：当館及び視覚障害者福祉センター

内容：天然記念物の鳥類に触れてみよう！

- ・進化ってなんだろう
- ・固有種ってなんだろう
- ・世界自然遺産への登録について

③触れる展示

場所：沖縄県立沖縄盲学校理科室（令和4年2月22日～3月18日）

沖縄県視覚障害者福祉センターロビーまたは受付（コロナのため実施できず）

内容：触って学ぶ琉球列島の固有種たち～天然記念物の鳥類をとおして～

- ・琉球列島に固有種が多いわけ
- ・ヤンバルクイナ、ノグチゲラ、ホントウアカヒゲの生態について
- ・鳥たちの鳴き声を聴いてみよう（音声再生装置）

4. 事業の実施状況

①タッチカービングの委託製作

ノグチゲラ及びホントウアカヒゲのタッチカービングの製作については、4月には委託契約を完了し、すぐに製作に取りかかった。急ピッチで製作が進み、7月には製作が完成し、納品された。ヤンバルクイナに関しては、令和2年度にタッチカービングの委託製作が完了していたので、沖縄島北部（やんばる地域）に生息する固有種であり天然記念物でもある鳥類が3種揃った形になる。

今回製作を委託した内山春雄氏は、日本バードカービング協会の会長を長年務め、多くの博物館で剥製に代わる展示物としてバードカービング作品を収めた実績をお持ちである。

博物館での展示に耐える作品とするため、解剖学的に精密に作られた作品は、大変クオリティが高く、健常者向けの展示物としても十分に価値がある。加えて、内山氏は、ご自身の作品を視覚障害を持つ方々に触察してもらい、鳥に親しんでもらう活動を続けておられ、その活動の中で、触っても壊れにくいよう強度を高めたバードカービングの製作技術を確立している。そういった技術や経験を詰め込んで今回製作していただいた3種の鳥類は、視覚障害を持つ皆さんが触って楽しむ展示物として、また健常者が観て楽しむ展示物として当館の内外で活用できる、汎用性の高い展示資料となった。

②ワークショップの実施

沖縄盲学校の児童生徒を対象にしたワークショップについては、令和2年度に試行的に実施し、その際すでに完成していたヤンバルクイナのタッチカービングを活用した。児童生徒の反応は大変良好で、沖縄盲学校とは、令和3年夏にワークショップを実施する方向で調整を進めていた。また、視覚障害者福祉センターとも令和2年度から何度か打ち合わせを重ね、ワークショップの実施について相談を進めていた。

しかし、実施を予定していた時期に、コロナにかかる緊急事態宣言や蔓延防止重点措置などが重なり、沖縄盲学校の児童生徒対象のワークショップは2度にわたる延期の末、中止となってしまった。また、視覚障害者福祉センターは休館が続き、結局、ワークショップの計画すらできないまま年度末を迎えてしまった。

沖縄盲学校も視覚障害者福祉センターも、趣旨には賛同し、大変前向きに受け止めて下さっていたので、今年度中のワークショップ実施は叶わなかったが、コロナが落ち着いた頃には、ぜひ実施したいと考えている。

③触れる展示

視覚障害者福祉センターについては、前述のとおり、施設自体が休館の状態だったので、展示も実現しなかった。

一方、沖縄盲学校については、ワークショップこそできなかったものの、製作した3種のタッチカービングを「触れる展示物」として理科室で展示することができた。沖縄盲学校は幼稚部から専修課程まで、幅広い年齢層の児童・生徒が在籍しているが（計43名）、小学部から専攻科までの児童・生徒22名に参加してもらうことができた。以下に展示の様子、児童生徒が触察している様子、そして児童生徒からの感想を原文のまま記す。

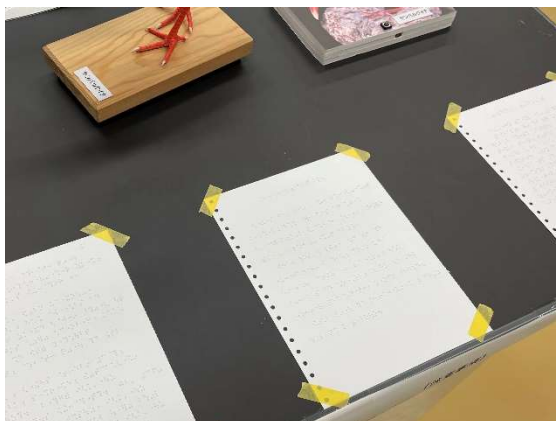
〔沖縄盲学校理科室での展示の様子〕



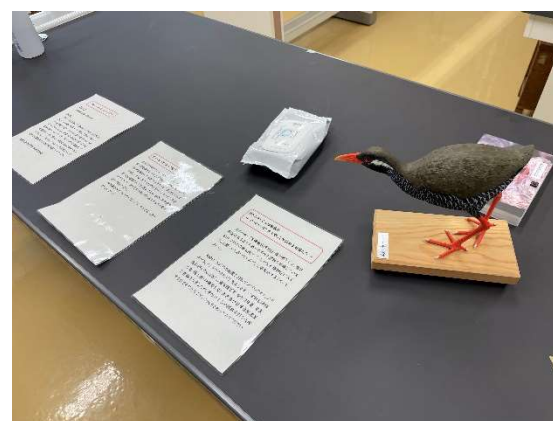
ノグチゲラ（右奥が音声再生装置）



ホントウアカヒゲと弱視者用の墨字説明文



点字の説明文（内容は右上図の墨字と同じ）



前年度に製作したヤンバルクイナ

〔参加した児童・生徒の様子〕



ノグチゲラを触察している様子



ホントウアカヒゲを触察している様子
（音声再生装置で鳴き声とともに楽しむ）

〔児童生徒からの感想〕

○中学部・高等部の生徒より

- ・鳴き声は聞いたことがあるものがあつた。鳴き声と形が一致して知れて良かった。ヤンバルクイナもノグチゲラも足がしっかりしていた。
- ・ホントウアカヒゲの色も声もきれいだった。小さい体だけど、響く鳴き声がすごいと思った。
- ・羽を広げた状態のものも知りたい。目の大きさが気になった。ノグチゲラは大きいのに木にへばりついていて面白い。穴から出ている子どもの模型も触ってみたかった。
- ・ヤンバルクイナの剥製を風樹館でも見たのを思い出した。ヤンバルには、ヤンバルクイナとノグチゲラしかいないと思っていた（これらの名前は聞いたことあるから）。でも他にも固有種がいると初めて知った。嘴はそれぞれ形が違っていた。個性があることが分かった。
- ・鳥によって大きさがぜんぜん違う。飛ぶ鳥と飛ばない鳥とでは、足にちがいがあつた。
- ・名前は聞いたことあつたけど、鳴き声を初めて聞いた。ヤンバルクイナは最近見つかったと知ってびっくりした。
- ・ノグチゲラのドラミングが面白い。自分の縄張りを主張するのはいいけど、敵に見つかつて襲われたりしないのかなと思った。こんな嘴で大きな音をたてると分かってびっくりした。

○担当した先生より

小学生は2名とも模型の形よりボタンを押して聞こえる鳴き声に夢中になっていたみたいです。3つ同時に押して一緒に聞いたらどんなふうに聞こえるのか？と試して喜んでいました。触るより、音に興味が向いていました。

専攻科の大人は、興味深く見ていました（弱視の方）。またヤンバルクイナの爪の様子を感心して触っていました。後ろ指？がある、鳥の爪はこんなにも鋭いと驚いていました。

5. まとめ

昨年度から始まった沖縄盲学校との連携だが、生物分野としては、剥製など触察に向かない資料の代わりにタッチカービングを用いた取り組みが上手く機能した。今後は、カービングの他にも触ることができる資料をたくさん考案し、ユニバーサルミュージアムとして、体験的なコンテンツを増やしていきたい。また、今年度は新型コロナウイルス感染拡大のため実施を断念したワークショップについても、次年度以降に再挑戦したい。

今回の取り組みをとおして、沖縄盲学校との連携が密になり、大変良好な関係を築くことができた。当館と沖縄盲学校との連携は、生物以外の他分野にも広がりを見せ、学校側として、博物館を積極的に利用してくださるようになってきた。今後も継続的に連携できる方向で、軌道に乗せていきたい。